

10 複 式 教 育

羽場邦子・秋山 哲・加藤潔己

1 研究テーマと複式教育について

複式教育の実践研究は、単にその学校の教育に留まらず、単式学級のみで構成される大規模校においても、これからの教育の在り方を探る1つの方向を示すものと考えられる。

本校では、「個が生きる授業」「個が生きる授業の評価」「豊かな感性を育む」と一連の研究テーマを通して、複式少人数学級の「よさ」を生かしていく教育の研究を進めてきた。その中で複式教育のめざす子ども像として常に追い求めてきたものが、「自立」である。これまでの研究成果をふまえ、研究主題を「自立をめざす子どもたち」、副題を「人やものとかかわることを大切に」として、実践、研究を進めている。

2 複式教育を通して育みたい自立の姿

ここでは、複式少人数学級の特徴を「よさ」として生かしながら、その中で育みたい児童の自立の姿を考えてみたい。

(1) 相手の立場や気持ちを尊重する

異学年相互のかかわりの中で、上学年の児童は下学年の児童との触れ合いから、これまでの自分の姿を重ねながら思いやりをもって接するようになる。また、その活動の中で自分の成長に気付くこともできる。下学年の児童は、自分たちの活動には上学年の児童の支えがあったことに気付き、喜びを感じると共に自らも学ぼうとする。さらにこれからの自分の姿を描くこともできる。このように、異学年のかかわりのなかで、互いに支え合い、高まり合い、自立に向かっていくことが期待できる。

(2) 自信をもって自己表現する

複式学級は少人数であるので、一人一人がじっくり互いの表現を見聞きすることができる。また、全員に発表の機会があり、自分なりの表現を十分に行うことができる。児童が自分たちで学習を進める場は相互に表現し合う場でもあり、自力で表現方法を学びとっていく場でもある。本校では、複式・少人数学級のよさを生かした指導や支援を行うことで、どのような場面や集団の中にあっても、自信をもって自己表現する児童に育てたいと考えている。

(3) 自ら学ぶ

複式学級の間接指導においては、低学年の段階から児童が自ら学習を進めていく力の育成が必要とされる。この考え方をさらに進めて、両学年の児童が、同時に、自分たちの力で授業を進めていく姿を見守るという「見守り」型支援（次節で詳しく述べる）を授業に積極的に取り入れ、さらに主体的に学ぶ児童の育成を図っていきたいと考えている。

3 子どもたちの「自立」をめざして

(1) 複式の特徴（よさ）を「自立」に生かす授業づくり

① 「見守り」型支援の充実

複式授業は、これまで多くの場合、教師が学年の間を移動する「わたり」が行われるものとされ、間接指導の中で子どもたちがいかに主体的に学習できるようになるかという方向で研究がなされてきた。この考え方をさらに深め、本校では、教師が、両学年の児童が自分たちの力で主体的に学習を進めるのを同時に見守りながら支援をしていく授業形態を構成していくことにした。これを「見守り型」支援と呼んでいる。この支援では、教師は、個や集団の状況を見取りながら、

柔軟かつ臨機応変に対応することができる。そのための支援の工夫は次の点が挙げられる。

- ・学習の進め方の明確化
- ・問題解決学習の場における活動の観点や自己評価基準の提示
- ・日直司会による進行の場の設定
- ・教室環境の整備

② 学びを共有する場の設定

複式学級の最大の特徴（よさ）は、当然のことではあるが、異学年の児童が常に同じ教室に在るということである。このことを学習づくりに生かしてこそ、複式のよさを生かした学習といえるのではなかろうか。これまで異単元異内容指導が中心であった教科（算数、国語等）においても、1時間の授業の導入や展開の部分で、さらに内容によっては単元全体を通して共通の学習の場を設定すると、児童はそれぞれの異学年児童の気付きや考え方にも触れながら、単一の学年で学習するよりも豊かな学習となることが期待できる。

③ 下学年に受け継がれていく活動

生活科等で、2年間の継続した単元を複式学級の特徴を生かして計画するとさらに豊かな活動が期待できる。また、A・B年度方式の学習では、年間計画上では、2年間で1サイクルとして学習が完結するが、実際には、学級の歴史となって構成児童は変化しても受け継がれて行く場合が見られる。これは、前年度の1年生の児童が、体験の記憶をもった2年生として学級に残り、次に伝えていく複式学級ならではのよさである。この学級の「小さな伝統」のよさに着目して、子どもたち自身の力で、次の下学年に受け継がれて行くような活動内容を考えていきたい。

④ 「見守り方支援」を生かした同内容異程度指導

一昨年より、同単元同内容異程度の学習も実践している。異単元異内容指導においては設定しにくい学びを共有する場が確実に設定でき、異程度の学習をすることで学年の発達段階に応じた目標も達成できると考えたからである。学びを共有する場を設定することで、少人数学級においても多様な考えに触れる場を保障でき、異学年児童が互いに学び合い、自らを高めていこうとする態度を育成することができると考えている。また、下学年でも上学年でも同じ単元を学習することにより、学習の定着と深まりや下学年に受け継がれていく活動も可能になる。異単元異内容指導のよさを生かしつつ、学びの共有の場を確実に持つことができる指導として、こうした単元の開発もしていきたい。

(2) 児童の手で企画・運営する活動

① 複式集会（複式学級低・中・高学年の交流の場）

複式運営委員の児童が中心となって企画し、楽しく交流しながらよりよい人間関係を培っていくための場として、「たんぼぼ集会」（一年生を迎える会、いもパーティー、6年生を送る会）などの集会活動を定期的に年間計画に位置づけている。毎年行われるこれらの行事を通して、経験を生かして行事を企画したり、次の年に向けて興味や意欲を喚起したりして、見通しをもって活動できる子どもたちを育てていきたい。

② 帝釈小交流（他校との交流の場）

本校では、これまで本校とつながりのある比婆郡東城町立帝釈小学校と交流学習を行ってきた。本校児童にとっての帝釈の豊かな自然の中での活動や、帝釈小学校の児童にとっての広島市街地での活動や本校児童との交流は共に貴重な体験である。今後も児童が自ら企画し、運営しながら交流学習を進めていくことができるように、両校の教師が連携をとりながら支援していきたい。

4 成果と課題

◎=成果 △=課題

(1)複式の特徴を生かした授業づくり

①見守り型支援の授業

◎日直の司会で授業の進行を行ったことは、「学習の見通しをもつことができるようになる」「どの子どもにも進行の役がまわってくる」「子どものペースで話し合い活動が行われる」など子どもが主体的な学習を進める上で成果があった。

◎子どもたち自身が学習を進めるのが当たり前になることで、明らかな「わたり」の授業に比べ「待たされている」とか「することがない」といった受け身の姿勢から、次に何をするか考える態度を身に付けていった。

◎低、中、高学年と一貫して、子どもたちが自分の力で学習を進める授業を行ったことで、ある程度学習スタイルを身に付けることができた。

△教師が、支援や助言をする場面を見分けることが難しく、子どもたちにどこまで任せるかを明らかにすることが課題である。

△話し合いに質的高まりをもたせるために、教師の支援や助言が適切な場面でなされる必要がある。

②学びを共有する場の設定

◎中・高学年では、個人のボードを使った発表を取り入れた。学級の一人一人の考えが一度に明らかになることで、比べて考えたり、質問をしたり、説明したりなど、子どもたちの意見交流を活発にする効果があった。

③異年齢集団のよさを生かした活動

◎異学年で意見交流する場を設けたことは、少人数学級の中で多様な考えを引き出すきっかけになること、下学年にとって学習の進め方の参考になること、上学年にとっては既習事項の確認になることなどの利点があった。

④同内容異程度の指導

◎2年間を1サイクルとして考えることは、子どもにとって学習のチャンスが2倍に増えることにつながる。また、下年時に次年度の学習の見通しをもつことができるという点において成果が大きかった。

(2)児童の手で企画・運営する活動

①複式集会

◎毎年行う活動において子どもたちに企画・運営を任せることで、自分たちで、企画・運営する方法を学ぶ機会となっている。

◎低、中、高学年がそれぞれ主催する活動を設けていることで、下学年の子どもたちが、上学年の子どもたちのすることをよく見て習うようになった。また、企画に携わらない学年もより主体的に行事に参加できている。

△毎年行わなければならない活動として捉えるのではなく、子どもたち自身が楽しむための一つの方法として行われるように考えていきたい。企画する子どもたちの願いが盛り込まれるものにならなければならない。

②帝釈交流

◎毎年継続して交流を行っていることで、文通などを通してイベントではなく日常の交流も盛んになってきている。

◎宿泊を異学年集団で経験することで、上学年には指導力を下学年には生活の力を身に付けるよい機会となっている。

△費用と時間がかかること保護者の協力が必要なことが課題といえる。